NO.１４８　発行日　：２０２４年９月１日

原発事故被害者 相双の会

連絡先
國分富夫（会長）
住所
〒976-0052
福島県相馬市黒木字迎畑 91-12
電話 090（2364）3613
メール kokubunpisu@gmail.com
事務局
鈴木宏孝　090-2909-6133（浪江）
関根憲一　090-4889-3726（富岡）
板倉好幸　090-9534-5657（南相馬）

ちょっとのつもりが…13 年半

近くて遠い「ふるさと」小高

福島原発かながわ訴訟原告団長　村田　弘

先日、東電刑事裁判の最高裁要請行動の後、近くの町村会館会議室で開かれた勉強会。最後に『ふるさ』を歌いましょう--そう言われて唱和した。でも、３番「山は青き…」まで来ると、やっぱり駄目だった。

そうだよ。阿武隈の山は**青かった**。飯崎川の水は**清かった**。いまも見た目は変わらない。だけど、すりガラスの向こうにあるようだ。数々の思い出も、避難した 2011 年３月 17 日でぷっつり切れたまま。家も畑もそのままなのに、なんて遠くなってしまったんだろう。そんなことを思うと、涙がにじんだ。鼻水が出た。

開墾３年、果樹園の姿を取り戻す

原町高校を卒業、ふるさとを離れて 42 年。待ちかねた新聞社の定年。ネクタイを放り投げて、カミさんの実家、小高の飯崎に移ったのは 2003 年６月。両親が亡くなってしばらく放っておかれた 2000 坪余りの畑は桐の木が林立、草が生い茂り、ジャングルだった。ハクビシンが住み着いて台所は崩れていた。

飯崎の枝垂れ桜を背にした果樹園は美しかった。何とかあの光景を取り戻せないか。

チェーンソーと草刈り機を買い込んだ。桐の木 150 本ほどを伐採、切断して枝葉をドラム缶でつくった焼却炉で燃やした。眼鏡のコーティングが溶けて買い直した。背丈を越す草刈り。北端から借り始め、南の端までたどり着くころには、北はもう元の木阿弥。こんなことを１年余り繰り返した。

次は果樹の苗植え。スコップで直径２㍍、深さ１．５㍍の植え穴を 20 個ほど掘った。刈り草、たい肥を入れ込んで埋め戻す。あかつき、恋未来１号、世界一…名前にほれ込んだ桃と林檎の苗を買い込んで植えた。２年余、なんとか果樹園らしき姿を取り戻した。

豊かな自然、地域のつながり

「５時、飯崎橋に集合」。えっ、５時？　移って間もなく、集落の呼びかけにびっくりした。小高川の支流、飯崎川の草刈りだという。朝霧の中２時間、２キロほどの堤防と川淵の草を刈る。金谷の先にある堤（水源池）からの水路掃除、淡水シジミを拾って帰る。ため池の掻い掘り、子どもたちと川の生物調査もやった。

５月になると阿武隈山ろく近く（ここは今も帰還困難区域）でのコシアブラ採り。ツクシ、田セリ、ノカンゾウの若芽摘み。秋にはキノコ。

畑の畝づくりをしていると、近くでヤマガラがじっと待ち、虫のサナギをついばんでいく。借り

残した草むらにキジが巣をつくる。

畑仕事が終わって、山に沈む夕陽をながめ、カツオの刺身で晩酌。「あぁ、これが本当の生き方なんだ」とか言いながらの日々だった。

悠久の歴史に生きてきた人々

とは言っても、退職金の半分を家のリフォームにかけ、半分は会社の年金基金に預けたので、おカネがない。そんな時に、隣の人から「常磐自動車道予定地の発掘調査があるから、行かないか」と声がかかった。

かなり大規模な発掘調査で、30～40 人ほどが参加。男衆はもっぱら土を削り、運ぶ力仕事、女衆がおしゃべりしながら刷毛で出土物を掘り出す役目。半年ほどたって、大発見。奈良時代末期の製鉄炉が出てきた。足踏みのフイゴまでくっきり残っていて、原発事故直前の 2011 年 2 月に「横大道製鉄遺跡」として国の文化財に指定された。小高には縄文時代の浦尻貝塚もあり、家の近くでは古墳時代の甕棺墓地も発掘されていた。数千年にわたる人々の暮らしの歴史が積み重なっている。

小高神社近くにある「あすなろデイサービスセンター」で週２回、お年寄りの話し相手になる傾聴ボランティアも続けた。明治、大正、昭和を生き抜いたお爺さんの話を聴き、100 歳記念に冊子にしてプレゼントする約束をした。が、お爺さんは避難途中で亡くなってしまった。

安らかな老後まで奪った原発事故

南相馬市に合併する前の小高商工会では、電話１本で自宅まで送り迎えするオンデマンドタクシー「e-まちタクシー」を全国に先駆けて走らせていた。

2010 年暮れ、e-まちタクシーを使って全国的にも有名になったイルミネーションを、お年寄りに楽しんでもらおうという催しを始めた。

夜のとばりがおりて、輝きを増す山間のイルミネーションを回るツアー（写真）は大好評。私も添乗して解説をした。１時間ほどのツアーを終えて自宅に戻ったご夫婦が、「冥途の土産。いつ死んでもいい」と語り合っていた。

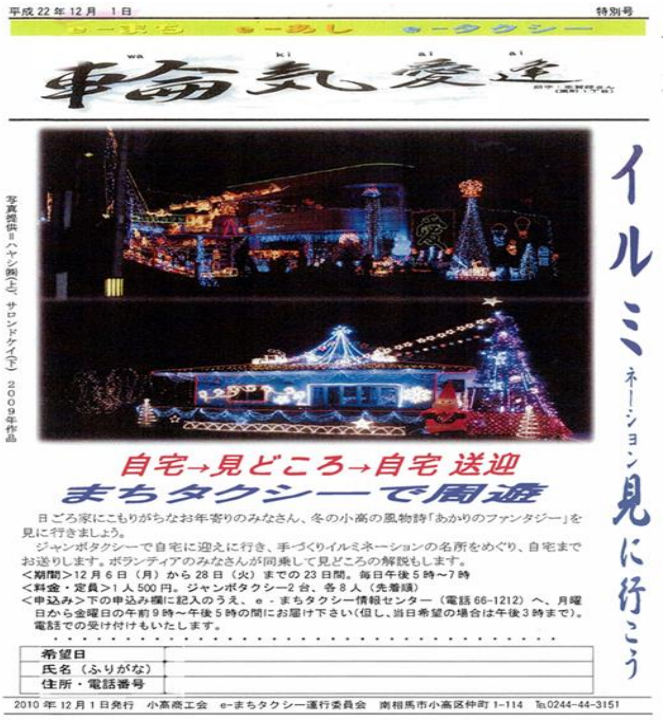
ひと時でも長く、安らかな老後をと願って、寄り添って、ささやかに暮らしていた地域をも、原発事故は一瞬にして破壊してしまった。

この過ちを繰り返させてはならない

お盆前、久しぶりに小高に帰って家の掃除やお墓参りをした。街中は櫛の歯が抜けたように空き地が点在し、背丈ほどに伸びた夏草の中で月見草がひっそりと咲いていた。

ふるさとは、すっかり変わってしまった

私も間もなく 82 歳。衰える体力と気力に鞭打って、最高裁に向かっている。「国に責任はない」などという判決を抱えて行くわけにはいかないのだ 。


平成 22 年 12 月 1 日　特別号

wa ki ai ai

輪気愛愛

イルミネーション見に行こう

写真提供：ハヤシ興（上）、サロンドケイ（下）　2009年作品

自宅→見どころ→自宅 送迎

まちタクシーで周遊

日ごろ家にこもりがちなお年寄りのみなさん、冬の小高の風物詩「あかりのファンタジー」を見に行きましょう。

ジャンボタクシーで自宅に迎えに行き、手づくりイルミネーションの名所をめぐり、自宅までお送りします。ボランティアのみなさんが同乗して見どころの解説もします。

＜期間＞12 月 6 日（月）から 28 日（火）までの 23 日間。毎日午後 5 時～7 時

＜料金・定員＞1 人 500 円。ジャンボタクシー2 台、各 8 人（先着順）

＜申込み＞下の申込み欄に記入のうえ、e-まちタクシー情報センター（電話 66-1212）へ、月曜日から金曜日の午前 9 時～午後 5 時の間にお届け下さい（但し、当日希望の場合は午後 3 時まで）。電話での受け付けもいたします。

希望日
氏名（ふりがな）
住所・電話番号

2010 年 12 月 1 日発行　小高商工会　e-まちタクシー運行委員会　南相馬市小高区仲町 1-114　Tel.0244-44-3151

沖縄と福島―思いは同じ

６月 23 日に開催された沖縄「慰霊の日」戦没者追悼式に参加し、宮古高校３年生の仲間友佑さんの詩の朗読に心をうたれました。何を言ってるのかわからない岸田首相、侵略戦争の過ちを語るでもない、基地縮小に取り組むでもない、戦後沖縄県民を守り切れなかったことへの反省もないことへの怒りが湧きました。

この詩を多くの皆さんに紹介したところ大勢の方から感想が寄せられました。『会報』に順次掲載させていただきます。（國分富夫）

沖縄「慰霊の日」戦没者追悼式

６月 23 日の沖縄全戦没者追悼式で朗読された宮古高校３年生の仲間友佑さんの詩

短い命を知ってか知らずか、蝉が懸命に鳴いている。冬を知らない叫びの中で僕はまた天を仰いだ。あの日から七十九年の月日が流れたという。今年十八になった僕の祖父母も戦後生まれだ。それだけの時が流れたというのに、あの日、短い命を知るはずもなく少年少女たちは誰かが始めた争いで大きな未来とともに散って逝った。大切な人は突然、誰かが始めた争いで、夏の初めにいなくなった。泣く我が子を殺すしかなかった、一家で死ぬしかなかった。

誰かが始めた争いで、常緑の島は色を失くした、誰のための誰の戦争なのだろう。

会いたい、帰りたい、話したい、笑いたい、そういくら繰り返そうと、誰かが始めた争いがそのすべてを奪い去る。心に落ちた暗い暗い闇はあの戦争の副作用だ、微かな光さえも届かぬような絶望すらもないような怒りも嘆きも失くしてしまいそうな、深い深い奥底で懸命に生きてくれた人々が、今日を創った、今日を繋ぎ留めた両親の命も、僕の命も友の命も大切な君の命もすべて心に落ちた。

あの戦争の副作用は人々の口を固く閉ざした。まるで戦争が悪いことだと言ってはいけないのだと口止めするように、思い出したくもないほどのあの惨劇がそうさせた。

僕は再び天を仰いだ、抜けるような青空を飛行機が横切る。僕にとってあれは恐れおののくものではない。

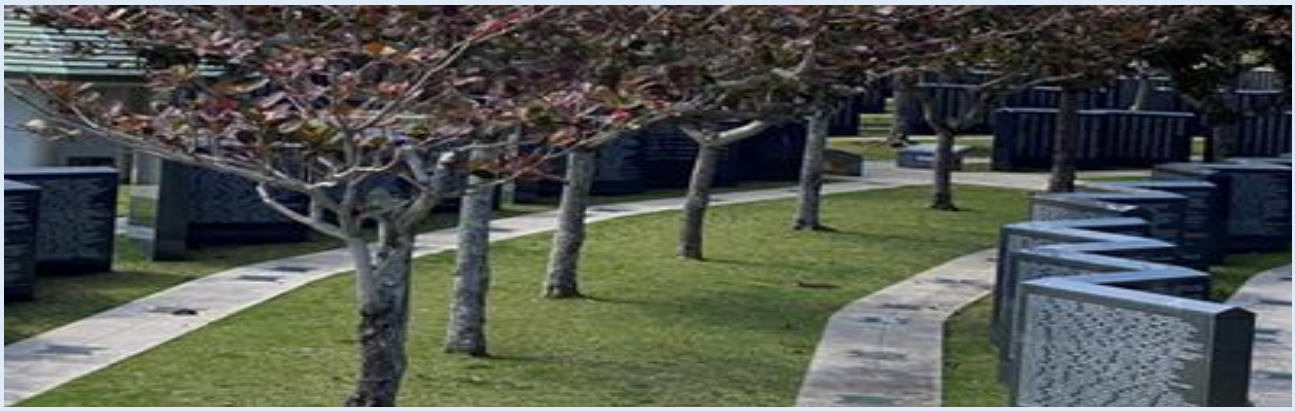
僕らは雨のように打ちつける爆弾の怖さも、戦争の「せ」の字も知らないけれど、常緑の平和を知っている。

あの日も海は青く、同じように太陽が照りつけていた。そういう普遍の中にただ平和が欠けることの怖さを僕たちは知っている。

人は過ちを繰り返すから、時は無情にも流れていくから今日まで人々は、恒久の平和を祈り続けた。小さな島で起きたあまりに大きすぎる悲しみを、手を繋ぐように受け継いできた。それでも世界はまだ繰り返してる。

七十九年の祈りでさえもまだ足りないというのなら、それでも変わらないというのなら、もっともっとこれからも僕らが祈りを繋ぎ続けよう。限りない平和のために、僕ら自身のために紡ぐ平和がいつか世界のためになる。そう信じて、今年もこの六月二十三日を平和のために生きている。

その素晴らしさを噛みしめながら。



兵庫県　岡崎宏美様

戦争経験者がいなくなる。軍隊や武器が住民を守るものではないという真実を、自分の言葉で伝える人が戦後 80 年近い歳月の中でいなくなる。またぞろ、軍人や強い国作りこそが国防という考えに染められる日が来るのではないか、そんな不

安に、しっかりとした光が届いた。それが仲間さんの詩「これから」だ。仲間さんの祖父母は戦後生まれだそうだ。おそらく私と同世代だろう。戦争を知らずに育ったが、それでも自分の親や周囲の大人たちから、戦争に向かう時代に何が起きていたのか、何故、人は戦争に突き進んだのか、結果どうなったのかを聞いてきた。そこに生きた人の言葉で「二度と戦争に繋がることはしてはいけない」と繰り返し聞かされ育った。今 18 歳、戦争を知らない仲間さんには、これまで生きてきた人の言葉がたくさんあるのだろう。

語り継ぐこととは、忘れてはいけないことを伝え続ける作業だ。

都合よく歴史を改ざんさせないために、自分の言葉で語り続ける力は大きい。

何ひとつ明日につながる解決策を見いだすことが出来ない国や東電。人間が制御できない原子力の本質を伝え、福島原発事故は地域、家族、一人の人間の全てを奪ったと知らせ続ける活動の力もまた大きい。

相馬市　福島と沖縄心の傷に向かう精神科医
蟻塚亮二様

2013 年に英国のケンブリッジ大学で開かれた「島の戦争研究会」という研究会に参加したことがある。私は当時沖縄で見つけた「戦後 60 数年を経てから発症する晩年発症型 PTSD を欧州の研究者たちに伝えて大変驚かれた。

沖縄戦は日本でほぼ唯一の地上戦であり、英米連合軍と日本との戦争は、「沖縄という島」が戦場となり「本土における地上戦」は回避された。つまり戦争ではしばしば本土でなく島が戦場となる。

だから今年の沖縄戦慰霊祭で宮古島の高校生が語った平和へのメッセージは、とりわけ宮古島など先島の人々にとっては血の出る様な切実な訴えだった。

沖縄では近年日米の戦略により、石垣島や宮古島など南西諸島に自衛隊の基地やミサイルが配置され、「また沖縄が戦場になるのか」という不安が強い。私は今も毎月沖縄で診察を行っているが、患者さんから「またくる沖縄戦が怖い」と切迫した不安を訴えられ、「安全な本土」にいる人間として言葉を失った。

東京の政治家やメディアは「中国が攻めてくる」という妄想を勝手に流し、沖縄に対中ミサイルや軍備を集中させている。そこには沖縄が戦場になり、沖縄人が犠牲になって東京の政治家やメディアは安全という構図が丸見えだ。

玉城デニー沖縄知事の、最初の選挙の時の演説を那覇市で聞いたことがある。「南シナ海を共に抱く中国や朝鮮半島、あるいはフイリピンや台湾と、沖縄は友好を強めたい。南シナ海を平和の海にしたい。そんな行動の積み重ねの上で、私たちの未来が平和になる」と。すごい政治家が出てきたと思った。

沖縄戦慰霊祭で宮古の高校生が語った平和へのメッセージは、玉城知事の訴えと重なり、沖縄県民や中国・朝鮮・台湾・フイリピンの人々の願いと重なる。これこそが９条の精神だ

2024 年 6 月 23 日　沖縄「慰霊の日」戦没者追悼式における仲間友佑さんの詩を読んで
東京　弁護士　笹山　尚人様

仲間さんの詩を読んで、「空気感」、を思った。

祖父母の代でも戦争を知らない世代になり、戦争の怖さを体験的に知らない社会で、私たちの社会は、どんどん「戦争国家体制」に突き進んでいる。他国の怖さを煽られ、これしか方法がないと思い込まされ、「仕方ないよね」という「空気感」を醸成され、私たちの社会のしていることは、逆に、その他国側に怖さを煽る根拠を与えている。

戦後間もない時期には、「戦争は怖い」という「空気感」があった。それを受け継ぐことの難しさ。でも、私たちはその努力を重ねよう。戦争を知れば、それをすることが、社会に住む市井の民にとって、なんの益もないことは今も昔も変わらない、そのことを私たちは知っているから。そのことを改めて決意させてくれる、力強い詩に、勇気をもらう。

次号へつづく